

昔、狼というけだものがいたそうだ。

画面で観てみると、犬とどこが違うのか、というようなものだ。

牧野葉月は神墊歩未の背中を見ながらそんなことを考えている。どうしてそんなことを思いついたのかは葉月にも解らない。意味はないのだ。その証拠に、ついさっきまで葉月は登校服の生地は厚くて動きにくい、というようなことを考えていたのだから。

ヴェリーショートの前髪。黒い髪と白いカラーに挟まれた、シャツより白い歩未の項。

登校日にはいつも見る。見慣れた景色である。

髪伸ばさないのと葉月は話しかける。ねえ、ともう一度声をかけると歩未は振り返る。

長い睫に縁どられた、小鹿のような瞳だ。

「けものの匂いがある」

膝を抱えた歩未は葉月の無為な問には答えず、もう一度前を向き直してからそう言った。

「けもの？」

「何かやだ」

歩未は膝の上で組んだ腕に顔を埋めるようにしてそう答えた。葉月は座ったまま前が出る。

「何それ？ けものの匂いなんて嗅いだことない」

「僕もないよ」

そっけなく歩未は答える。じゃあ何で判るのと問うと、歩未は右腕をすつと出した。

白くて細くて靱な腕。よく解らないけど女の子の腕だ——と葉月は思う。

そして葉月は鼻を近づける。

「別に匂いしないよ。身体洗剤の匂い」

「そう」

歩未は腕を戻して再び膝を抱えた。遠くを見ている。葉月は更に前に出て、歩未の横に並んだ。端正な——という月並みな表現が似合う、凛とした横顔である。

「何がけものなの」

「よく解んないよ。そう思っただけ」

歩未は眼を伏せる。葉月は逆に、歩未がそれまで見ていた方向に視線を投じる。

覇気のない燻んだ街並み。その先に——動画スティックみたいな何本かのビル。

——つまらない。

動きもしない。歩未は何を見ていたのか、たぶんただ遠くを見ていたのだろう。対象物を見るのではなく、ここからそこまでの距離をこそ見ていたのだ。モニタに距離はないから。

暫く黙って空気だの風だの、見えもしないものを見た。

葉月と歩未はコミュニケーション研修が終わった後、必ずこの場所に座って無為に景色を眺める。カリキュラム終了後はすぐに帰宅するように指導されてはいるのだが、真つ直ぐ帰る者は殆どいない。普段から出歩いている連中はそのままどこへでも行くようだし、滅多に自宅から出ない者達にとつても週に一度の登校日は屋外に出られる——或は引つ張り出される日になる訳だから、これは仕様がなと思う。指導員達もある程度は見逃しているような節がある。そもそもコミュニケーション研修というのは社会性を養うという目的の下に行われているものなのだそうだから、少し街をふらつくくらいはいいだろう——という見方もあるようだ。

でも、ふらつく程度のことしかできないのだけれど。

街には何も無い。リアルショップに陳列されている商品はやたら高級だったりマニアックだったりするだけだから、興味もないし、とても子供に買える値段ではない。飲食店は監視が厳しいからつまらないし、長居をするだけ料金もかかる。アミューズメントに行く者は少しはいるようだが、モニタが大きいというだけでメニューは自室のそれと変わりが無い訳だし、遊んでいるのは大半が大人だから子供は遊びにくい。だから大方の者は公園でスポーツ競技の真似事をしたり、あちこちで屯してたらだと会話を交わすだけなのである。他愛もないものなのだ。もっと不道德なことをしようと思えば夜まで待たねばならないし、ならばわざわざ登校日を選んですることも無いのだ。

コミュニケーションの授業はエリアによつては結構長引くところもある。でも葉月達のエリアは無保護者児童や特殊環境家庭の占める率が多いわりに授業が淡白で、すぐに終了する。区域内の治安もいしコミュニケーション内の秩序維持がスムーズに行われているから——だそうである。そういう訳で講習自体は十五時には終わってしまう。時間はいやという程ある。

でも——葉月はただ屯してたらだと会話するのも飽きてしまった。話題がない。端末に向かっている訳でもないのに勉強のことを話題にするのも馬鹿馬鹿しい。情報交換なら自宅にいてもできる訳だから、子供同士が顔を突き合わせてまで話すことなどないのである。

ただ、折角外に出たのだし、寄り道でもしないとわざわざ家を出て来た甲斐がない——ようにも思う。無為なら無為で徹底的に無為な方がいい——とも思う。

だからこうして、膝を抱えて景色を眺めるようなことをする。

最初、ここには歩未がひとりで座っていた。下校途中に偶然その姿をみかけて、葉月は少し不思議に思ったものである。歩未は五年前に転入して来た娘である。同じ受講クラスだから葉月も名前くらいは知っていたのだが、それまで存在を意識したことは一度もなかった。葉月はその時どうにも気になって、登録データを検索してみたのだった。同じクラスなのだから年齢は一緒なのだろうが、学習レベルには個人差がある。歩未は葉月と同じレベルだった。

その翌週、葉月は何となく歩未の横に座った。何を話すでもなかったが、ただ座った。暖かくなってからはずっとそうしている。

葉月は歩末の真似をしている訳でもないし、歩末と親しくなりたかった訳でもない。この場所は無為にすぎすにはいい場所なのだ。他に意味はない。邪魔だとも言われないから一緒にいるだけである。

歩末は、また自分の腕に鼻先をつけて、それから右の掌を開いてそこに見入って、それからぐつと拳を握った。

「何の匂いよ」

「解んない。人の——匂い」

「けものって言ったじゃない」

「じゃあ言い直す。生き物」

「自分の匂いじゃん」

「そうだけど」

綺麗な娘だと思う。髪も短いし装いも地味なのだけれど、髪の毛を伸ばしてちゃらちゃらと飾っている自分よりもずっと女の子らしいと葉月は思う。自分はどうして潔く髪を切れないのだろうと、そんなことも思う。葉月が言葉継ぎごととするより一瞬早く、す、と歩末は立ち上がった。そしてくるりと軀を返す。葉月も振り向く。

階段の手摺の所に都築美緒が立っていた。

「叱られるぞ」

「この続きは、書籍でお楽しみください。」

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。